

新聞に掲載されました！

2023
おふらいんきゃんぷ

県内総合 ニュースセレクト

向陽台病院(熊本市) 子ども向けキャンプ

自然に触れ“脱ネット・ゲーム依存”



大学生ボランティアらとレクリエーションを楽しむ子どもたち(左の3人) =阿蘇市

インターネット依存やゲーム依存に苦しむ子どもが、一時的に端末から離れ、自然の中で活動する「オフラインキャンプ」。熊本市の向陽台病院が9月中旬、1泊2日の日程で阿蘇市の国立阿蘇青少年交流の家で初めて開催した。比江島誠人院長(56)は「ネットやゲーム依存は昼夜逆転の生活で不登校になる負の連鎖を起す。子どもたちには他の楽しみがあることを知ってほしい」と狙いを語る。

キャンプには、生活リズムを崩すなどして不登校となり、同病院で診断を受けた小学4年〜中学3年の12人が参加。グループに分かれて大学生ボランティアや病院職員らと草原を巡った。草原にはコミュニケーションを取りながら問題を解くクイズや、自然を活用

たき火、草原散策…現実世界楽しむ

てみたいと思った」。保護者からは「集団生活で自信が付いたのか、印象が明るくなった。こういう場はありがたい」と感謝する声が上がった。

国立病院機構久里浜医療センター(神奈川県)によると、2017年のゲームを含むネットに依存する中高生は推定93万人。世界保健機関(WHO)は19年に、ゲーム依存を「ゲーム障害」として国際疾病に認定した。向陽台病院の比江島院長は「新型コロナウイルス禍もあり、子どもたちは人との関わりをネットに求め、ますますそこから抜け出せなくなっている」と危ぶんでいる。同病院の児童思春期病棟の病床使用率は20年以前は30%だったが、以降は満床が続いた。

同病院では、子どもたちの生活改善に向けて保護者同士で意見交換する場の提供や、親子でネットやゲームをする際のルールを決める面談をしてきた。キャンプは、病院の外で子どもたちの体験の場を作り、支援につなげようと企画した。比江島院長はキャンプの成果について「子どもたちには、現実世界を楽しむ能力があると再確認できた」とする。一方で「九州に支援の場はまだ少ない」と指摘。「他の専門病院や教育委員会などと協力しながら、治療の選択肢を増やしたい」と話した。(小田喜一)